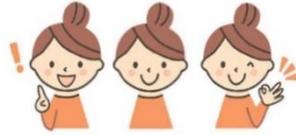




がん相談室・がんサロン『ゆい』 たより 春号 平成30年4月

新緑が輝く季節になりました。今年度も相談室のスタッフは3名で担当いたします。
今年度も皆様のお力になれるようがんばります。どうぞよろしくお願いいたします。

がん相談室



がんに対する治療法について「標準治療」という言葉を聞いたことがあると思いますが、詳しく説明を受けたことがある方は多くはないと思われます。

そこで今回は「**標準治療とは何か**」についてまとめてみました。

「標準治療」と聞くと平均的な治療と思う方も多いと思いますが**標準治療とは安全で最も効果が高いと科学的に裏付けのある現在できる最良のがん治療を言います。**標準治療ではがんの種類、ステージなどによって手術、抗がん剤治療、放射線療法などの組み合わせ方や手術の術式、抗がん剤の選択や投与方法、放射線の照射法などが定められており、**どの病院でも受けることができるものとなっています。**

近年、がん治療の進歩はめざましく毎日のように「最先端の治療」が開発されたという情報が入りますが、**最先端の治療が優れているとは限りません。**最先端の治療は、臨床試験などで評価され標準治療より優れていることが証明され推奨されれば新たな「標準治療」となるのです。

がんサロン『ゆい』

「ピアサポーターとの茶話会」をふりかえって

がんサロン『ゆい』では昨年度からがんを体験した方が集まり、同じ体験をしたピアサポーターを交えた茶話会を行っています。昨年度は月1回開催し、延べ117名（男性12名、女性105名）の方に参加していただきました。茶話会では自己紹介から始まり、がんと言われた時のつらかった気持ちや、治療をどうのりきったかなど体験をしている方しかわからない思いをお話しされています。参加された方からは「いつもは話せないことを安心して話すことができてスッキリした」、「自分だけではないと思え元気がでた」といった感想をいただいています。話したくない時は聞くだけでも大丈夫です。今年度も続けて開催していきますので是非参加してみませんか。

・『ゆい』によせられた作品・

春らしいですね！



トピックス

東北大学病院が「がんゲノム中核拠点病院」に指定されました！！

がんは遺伝子に生じた異常が原因で発生します。がんゲノム中核病院である当院では、患者さんのがん細胞に生じた複数の遺伝子異常を解析する「遺伝子パネル検査」を受け付けております。

※ 詳しくは東北大学病院がんセンターホームページをご覧ください。

ひとこと

今年は桜の開花が早かったですね。仙台では入学など新たなスタートをきった人に満開の桜もお祝いしてくれました。花をバックに記念写真を撮った人も多かったと思います。桜前線はあっという間にかけ抜けていきましたが、もう少しゆっくり咲いてほしかったという思いもありますね。

がん患者さん、ご家族のみなさんが安心して療養生活を送れるよう専門スタッフがいろいろなテーマでお話をしています。

今年度も新たにいろいろなテーマで講話を企画しています。

今回は1月、2月に開催した講話をご紹介します。

5月は昨年度も好評だった『笑いの効用』についてのお話しです。ご期待ください。

☆ 1月24日 「漢方でこころとからだを元気にしよう」

(漢方内科 大澤稔先生)

毎年先生の明るいキャラクターもあって大人気の講話です。女性によくある「困った症状」の“うつうつ”、“イライラ”、“ドキドキ”、頭痛“肩こり”などに効果のある漢方薬の話しに続き、がん治療に伴う副作用、合併症、後遺症などに対する支持療法としての漢方薬についての話しがありました。漢方薬は抗がん剤の副作用である下痢、口内炎、食欲不振、しびれ、痛みなどの症状軽減や体の免疫力アップにも効果が認められているということでした。国のがん対策としても推奨されています。副作用症状に苦しむ人や治療予定で不安のある患者さん、ご家族の方には朗報になると思います。抗がん剤治療の相棒として漢方薬をうまく使い元気に乗り切れるように症状がある時は我慢せず主治医と相談してみましよう。

☆ 2月28日 「抗がん薬の副作用と対処方法」

(東北大学病院化学療法支援室 薬剤師 小林美奈子さん)

講師はがん専門の薬剤師さんです。お話しされた中から「副作用を上手に克服するときのポイント」についてご紹介します。

① がん化学療法の副作用にはどのようなものがありいつ頃現れやすいのかを理解する。② 患者さん自身で実施できる予防法もいくつかあります。可能なものから実施する。③ 重大な副作用はどのようなものがあるか、初期症状はどのようなものかを知っておく。④ すぐに伝えなければならない症状を把握する。⑤ 「治療手帳」(体調管理ノート)をつける。副作用は強く症状が出る人とそうでない人がいますが、副作用について知ったうえでうまくコントロールしていくことが大切です。一人で悩まず医療スタッフにご相談ください。